東京成徳短期大学　紀要　第三十六号　二〇〇三年

高井蘭山編『女重宝記』所載〈胎内十月の図〉考

山下琢巳

はじめに

江戸時代も終焉に近づいた弘化四年（一八四七）の初春、江戸の書肆和泉屋金右衛門から『絵入日用女重宝記』五巻五冊が刊行された。婦女子の心がけるべき嗜みや教養を、絵入りの平易な文によって説く。高井蘭山による編輯で、葛飾応為が挿絵を描く。

遡ること一五五年、上方を中心に町人文化が花開いていた元禄五年（一六九二）五月、「艸田寸木子」すなわち苗村丈伯の序文を付した『ゑ入女重宝記』五巻五冊が、京寺町の吉野屋次郎兵衛より板行された。この元禄五年版は、京・大坂・江戸の三都で、履刻版を四種、改刻版を四種生み出していき、江戸中期頃まで板行されて流行した。(注1)

「己丑孟冬（文政十二・一八二九・年十月）」の年記を持つ、蘭山の序には、次のようにある。

書肆玉巌堂求版に艸田寸木子女重宝記五巻あり。女日用の種々まめにあつめたれども今はた流行におくるゝ事多し。只過し世のさまを今見るのおもひあり。いはゞ性僻人我の相ふかく貪欲にて理をしらず直ならで拙ものは女なりと兼好が徒然に書しを実にもとてひかみをため直きをしらしめ拙きを去て風雅に艶ならしめん設に此草帋を著せしよし。今其謬を訂し足ざるを補ひあらたに梓行せん需によって小しく筆を加るのみ。

江戸中期以降、女子教育の書として〈女子用往来物〉が数多く刊行された。その規範となり続けたのが、『女重宝記』であった。しかし、『女重宝記』そのものの記述は、江戸後期に至っては、既に時代遅れになっていた。この時期、戯作者の間では、山東京伝の『近世奇跡考』（文化元・一八〇四・年十二月刊）以来、柳亭種彦『用捨箱』（天保十二・一八四一・年刊）等に代表されるように、江戸初期の風俗を懐古的に振り返って考証するという風潮が起こっていた。これに目をつけた書肆は、女子教育書としての原点ともいえる『女重宝記』のリメイクを蘭山に依頼した。

元禄版『女重宝記』三之巻は、「くわいにんの巻」として、お産と産後の養生を説くが、その三ノ一には、胎児生成の様子を図示する〈胎内十月の図〉とその説明である〈胎内十月の由来〉が載る。このふたつは、当時の宗教的信仰を劇化した説経・古浄瑠璃でも語られて、一世を風靡したものであった。

西洋解剖学書の本格的翻訳書とされる『解体新書』が刊行されたのは、安永三年（一七七四）。大槻玄沢による重訂版は、文政九年（一八二六）に出版。蘭学の導入によって、産科も日進月歩を遂げていた時期において、蘭山は、元禄版『女重宝記』に記された〈胎内十月の図〉をどのように扱ったのか。このことにつき見ていく。

一、元禄版の〈胎内十月の図〉

蘭山編『女重宝記』巻三ノ二「懐妊か懐妊にあらぬかを知事」には、上段に、仏菩薩と月々の胎児の形、下段にお産の様子を描いた見開きの挿絵が載る（図一）。これは、元禄版『女重宝記』巻三ノ一「懐妊の事并ニ養生の次第」に所載される挿絵（図二）を、当世風に描き直したものである。蘭山編『女重宝記』の画者応為栄女は、葛飾北斎の娘で、父のもとで作画を続け、その助手としても作画した女性。その上段に描かれる絵の意味は、元禄版『女重宝記』巻三の四「懐妊のとき帯の事附タリ日どり胎内さがし」には、次のように記される。

およそ懐妊というは経水ありたる月より十月めをうみ月とするなり。
一月めを医書には白露のごとしといふ。仏書には錫杖のかたちのごとくにして不動のうけとり給ふといふ。
二月めを医書には桃花のごとしといふ。仏書には獨鈷のごとくにて釈迦如来のうけとり給ふといふ。
三月めは三鈷のごとくにて文殊のうけとり給ふ。
四月めは五鈷のごとくにて普賢のうけとり給ふ。
五月めより人間のかたちをそなへて地蔵ぼさつのうけとり給ふ。
六月めは弥勒
七月めは薬師
八月めは観音
九月めは勢至
あたる十月は阿弥陀如来のうけとり給ひて人間じやうじゆのかたちあらはるゝなり。
懐妊の女中はその月々のほとけを信心し給へばむまるゝ子かたわならずしてかしこきものなり。

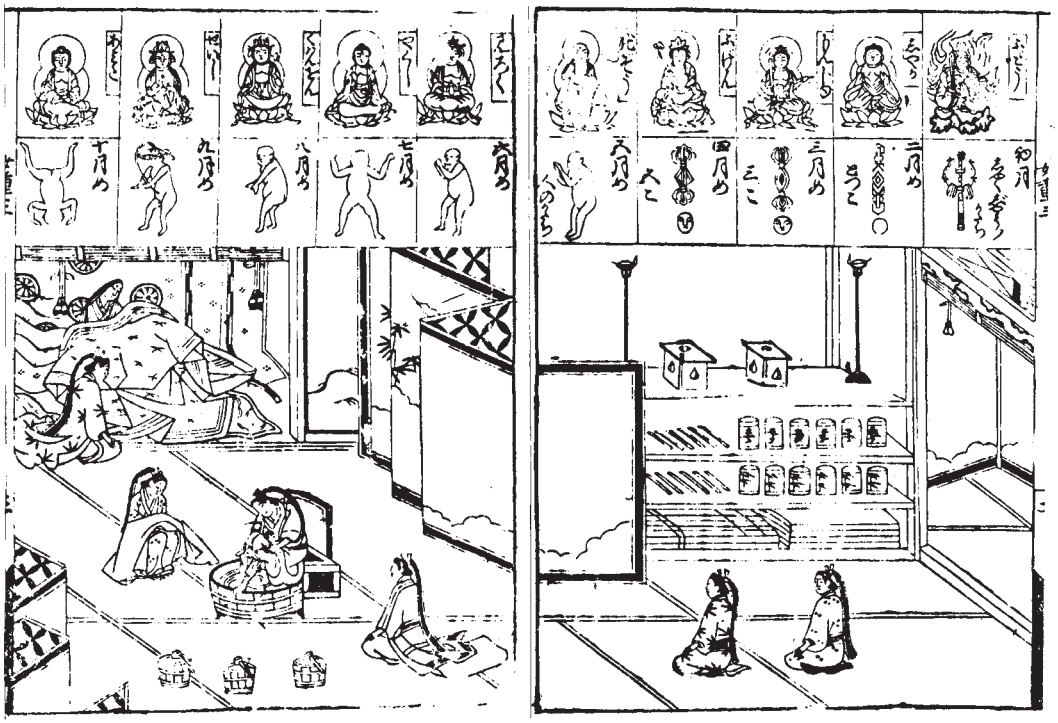
版本見開きの挿絵上段に〈胎内十月の図〉を載せ、その下段に物語の一場面を描くという様式は、『熊野之権現記こすいてん』（万治元年・一六五八・十月さうしや九兵衛板）を始めとする〈熊野の本地〉系の説経・古浄瑠璃正本に見え、その詞章には、〈胎内十月の由来〉が記される。[注2] また、この〈胎内十月の由来〉は、『弘法大師出世之巻』（井上市郎太夫正本、延宝七年・一六七九・四月）、『甲子祭』（宇治加賀掾正本、天和四年・一六八四・正月）、『日本九ほんのじやうど』（伊藤出羽掾正本カ、貞享末頃・一六八七・カ）、『蟬丸』（竹本義太夫正本、元禄六年・一六九三・二月以前カ）にも見え、浄瑠璃において盛んに語られていた。[注3]

しかし、蘭山は、〈胎内十月の図〉を挿絵として載せるものの、〈胎内十月の由来〉には、否定的な見解を持っていた。

世上に懐妊初月より十月の間腹内にやどる所の子躰をなすかたち。又毎月守り給ふ仏有て月々に次の仏へわたし給へば其仏又うけ取給ふ。不動明王より臨月阿弥陀如来におよぶ。此事世上の女中真信に思ふ人むかしより多し。女中方に学問して物の理をわきまへたるは甚まれなれは今さら何もいふに及ず。されどももし物の理合わかりて腹の中に仏具やどり三鈷五鈷より人となるは奇怪の事ニて左様の理は有まじ。

医師香月啓益の『婦人寿草』は、例言に「元禄壬申孟秋下弦日」すなわち元禄五年（一六九二）七月二十二日の識語を持ち、「宝永三丙戌年（一七六〇）十一月吉祥日／上村四郎兵衛開板」との刊記を持つ。その内容は、求嗣、胎教、妊婦食忌・薬忌、産前諸病、産前治法、妊娠産図、難産、臨産、産後諸病等について、『素問』『病源侯論』『千金方』『婦人良方』『医学正伝』『古今医統』『便産須知』『産宝論』『明医雑著』等の中国の医書を引いて、詳細に論述する。この書には、お産に関する従来の迷信・妄説からの脱却をめざそうとする態度が強く打ち出されているが、その巻中四第廿一「胎内形体の説」では、医書である耆婆五臓論・顱顖経の説、仏典である阿難問経・入胎経の説とともに、胎内十月仏菩薩守護の説に対する批判が、次のように述べられている。

（図一）蘭山編『女重宝記』



（図二）元禄版『女重宝記』

婦人良方にいはく、五臓論に耆婆者論と称するあり。姙婦一月には珠露のことし。二月は桃花のことし。三月には男女わかる。四月には形象具はる。五月には筋骨成る。六月には毛髪生す。七月には其魂遊んて兒よく左の手を動す。八月には其魄あそんて兒よく右の手を動す。九月には三度身を転す。十月には気を受足といへり。巫方か顱顖経にも十月の形象をのせたり。陳自明の説に、以上の諸説を推究るにみな鄙浅なる論にして、みたりに其名を托するなるへし。三蔵仏書の説にいたりては皆あやしきにわたる。かんかふへからすといへり。然れは阿難問経の三十八箇の七日毎に形体変し二百六十六日を経て生るといふ説、また入胎経の胎内の五位なといふ事みなあやしき事ともなるへし。和俗胎内の形体を仏具にかたとり、独鈷・三鈷・鈴・錫杖のかたち月々にかはり、其月々の守護の仏ありなといふ説、生下未分抄といふ書にみえたれとも、これまたあやしき事のみにてとるにたらさる事也。啓益按するに、胎内一両月はたゝ一点の珠露のことく漸々に其形体を具ふる也。三月にして男女わかるとあれは、是より形体をなし始め次第にそなはり、六七月にいたれは形体まったくそなはり、十月に満て生下するなり。七月子よりは出生して生育するを以しるへきなり。

ここで、『婦人寿草』は、『女重宝記』にも載る〈胎内十月の由来〉を「生下未分抄」に出るとするが、〈胎内十月の由来〉は、『生下未分語』（正保四年・一六四七・刊）、あるいは『三賢一致書』（慶安二年・一六四九・刊）といった書にも見え、改版・履刻されて江戸前期に盛んに出版されていた。[注4] そして、このうち『三賢一致書』で、『三界一心記』と題するものには、文政六年（一八二三）版、慶応二年（一八六六）版といった後刷り版がある。また、嘉永三年（一八五〇）には、『三界一心記』を春屋繊月が心学の立場から補述し、松川半山が挿絵を描いた『心学要解三界一心記図絵』三巻三冊が、大阪の書肆松雲堂・栄壽堂合梓で出版された。この書では、〈胎内十月の由来〉の部分も補説が加えられ、挿絵が当世風に描き直されている（図三）。

元禄版『女重宝記』を著した苗村丈伯は、致仕する以前、彦根藩井伊侯の侍医であったとされ、『正伝惑問増補頭書』（天和二年・一六八二・刊）『俗解襲方集』（元禄六年序刊）といった医書の注釈書や俗解書を著している。[注5] 丈伯は、胎児生成の様子を記すに、「一月めを医書には白露のごとしといふ」「二月めを医書には桃花のごとしといふ」と医書の説を引く。しかし、それ以外の記述は、人口に膾炙していた〈胎内十月の由来〉をその説明にあてた。致仕後、実用書・俗解書の著述に従事した丈伯は、庶民の心を掴むために、当時説得力を持って信じられていた説をあえて自著に載せた。これに対し、同時代の啓益は、医師としての矜持から、この俗説に批判を加えた。そして、蘭山は、一応〈胎内十月の図〉を挿絵に載せるものの、〈胎内十月の由来〉には、やはり否定的な見解を述べる。

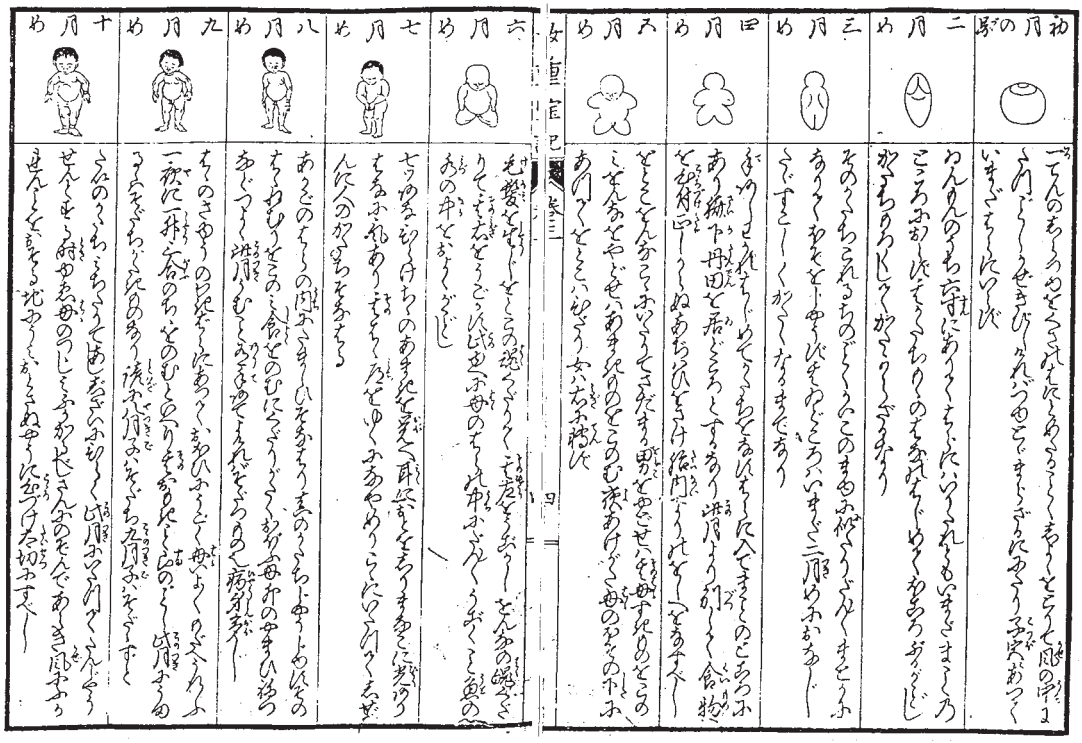
幕末まで、命脈を保ち続けた〈胎内十月の図〉と〈胎内十月の由来〉に対し、蘭山も女訓俗解書の再編集という性格上、それを無視することはできなかった。しかし、啓蒙家としての蘭山は、また、この俗説の浸透を逆手にとって、新説を披露する。

二、蘭山の〈胎内十月の図〉とその説

元禄版『女重宝記』所載の〈胎内十月の図〉には、上段に、不動・釈迦・文殊・普賢・地蔵・弥勒・薬師・観音・勢至・阿弥陀が描かれ、その下段には、胎児の形として、初月―錫杖・二月目―独鈷・三月目―三鈷・四月目―五鈷という仏具が描かれる。不動から阿弥陀に至る十仏は、鎌倉時代のはじめに日本で偽撰されたといわれる『地蔵菩薩発心因縁十王経』では、人の死後、冥界でその人の罪を裁くという秦広王以下十王の本地仏とされ、これに阿閦・大日・虚空蔵を加えた十三仏が、年忌法要の仏として室町末期から江戸初期にかけて盛んに信仰された。この法要は、様々な宗派によって行われたが、人の死後を司る仏を、人の生を守護する仏へと転換したのは、胎児の形を錫杖や独鈷といった仏具にたとえることから密教系の宗派であったと考えられる。

蘭山は、この説が、胎児を守護するのが外来の仏であるという点を批判して、日本人に馴染まないものであるとする。

（図三）『三界一心記図会』



（図四）蘭山編『女重宝記』

我は日本国神の御裔の人なれば天竺の仏が十月の間かはり番に請取て守るべきいはれなし。一日の内に何万人うまるゝかしられぬ人を神通にもあれわづかの仏にていく千万人を毎月まもるとは理にもあたらぬことかな。又人々の守り本尊といふものが有なら日本数万人御恩をかうむらざるは壱人もなき。恐ながら日光様か扨は主人か両親は其身の守本尊にも有べき。

蘭山は、通俗仮名抄『野馬台詩国字抄』（寛政九年・一七九七・刊）で、唐人の知恵と知識を凌駕する日本人としての吉備大臣を描き、読本『絵本三国妖婦伝』（文化元年・一八〇四・刊）では、天竺で斑足太子の華陽婦人、唐土に渡って殷の紂王の妲己そして周の幽王の褒姒、さらに日本に渡って玉藻前となった金毛九尾の妖狐が、神国の威徳によってようやく退治されるという物語を取り上げた。国学思想が浸透するなかで、蘭山がその影響をどれほど受けたかは定かでないが、旧説に外来思想の導入があることを盾にとって新説の〈胎内十月の図〉を披露する。

その新説は、「日本国神の御裔にうまれよその国の仏が守り本尊なるべきはづはなしと心をけつぢやうして見給はゞ、次に出す医書に云胎内十月の図を見給ふべし」として、上段に、初月から十月までの胎児の図が描かれ、下段にその説明を記すという形式（図四）で提示される。

・初月の図
一てんのしらつゆをくさのはにとめたることく、しよくをとりて風の中にたつごとし。かぜきびしければ、つゆとゞまらざるにたり。子宮にあつていまだはらにいらず。

・二月め
ゐんもんのうち六寸にありて、はらにはいりたれとも、いまだまことのところにおらず。其かたちもゝのはなのはじめてほころぶるがごとし。かたちもろくしてかたからざるなり。

・三月め
そのかたちこれるちのごとく、かいこのまゆに似たり。だん〳〵まとかになりてほそをしやうず。其ゐどころはいまだ二月めにおなじ。ただすこしくかたくなるまでなり。

・四月め
手あしわかれはじめてかたちをなす。はらに入てまことのところにあり。臍下丹田を居どころとするなり。此月より別して食物を心付正しからぬあぢはひをさけ胎内よりのをしへをなすべし。

・五月め
をとこをんなこゝにいたりてさだまる。男をやどせは其母すきものをこのみ、をんなをやどせはあまきものをこのむ。夜あけがた母のほその下にあつてをとこはひだり、女は右に転ず。

・六月め
毛髪を生じ、をとこの魂くだりて其左をうごかし、をんなの魂くだりて其右をうごかす。此ゆへに母のはらの中にだん〳〵うごくこと魚の水の中をおよがごとし。

・七月め
七ツあなひらけ、ちゝのあまきを覚へ、耳におとをしり、まなこに光あり、はなに気あり。其はゝ道をゆくになやめり。こゝにいたつてしぜんに人のかたちそなはる。

・八月め
あかごのはらの内にたましひそなはり、真のかたちじやうじゆす。そのはゝねむりをこのみ、食をのむにくだりがたくおぼゆ。母外のやまひねつなどつよく、此月うむこと有。手あてよければそだつもの也。病身多し。

・九月め
はゝのさゆうのわきばらにあつておほひにうごく。母いよ〳〵もだへうれふ。一夜に一升三合のちゝをのむといへり。其おもきこと山のごとし。此月にうまるゝはそだちかたきものなり。諺に八月子はそだち九月子はそだゝずと。

・十月め
たいのかたちみちたりて、あしじざいにひらく。此月にいたつてたんじ

やうせんとする時ゆゑ母のつゝしみふかかるべし。さんにのぞんであしき風にふかれんことをおそる。地にうみおとさぬやうに心づけ大切にすべし。

かつて、香月啓益は、『婦人寿草』において、元禄版『女重宝記』にも所載される〈胎内十月の図〉を、古医書・仏典の説とともに、『婦人良方』を引用することによって批判した。『婦人良方大全』、宋の陳自明撰、欽定四庫全書本に「嘉熙元年（一二三七）八月良日建康府明道書院醫論臨川陳自明良父序」との自序を持つ。その巻十「胎教門、妊娠總論第一」に、「凡婦人妊娠十月。其説見於古書。有不同者多矣」として、先ず『巣氏病源候論』、次に『耆婆五臓論』をあげ、最後に『顱顖経』なる撰人未詳の書（四庫全書所収）をあげる。そして、「今推究數説之理。如五臓論者類。皆淺鄙不經。往往妄託其名。至於三藏佛書。且後渉怪誕漫不可考」として、『耆婆五臓論』は、その書名に妄りに名医耆婆の名を使うがその説の浅鄙なること、また経典に説く十月胎形も怪しく信じるに足りないという。『婦人大全良方』の引用のはやく見えるものとして梶原性全撰述の『頓医抄』（正安四年・一三〇二～嘉元二年・一三〇四・成）および『万安方』（正和四年・一三一五・成）の婦人科がある。日本の医書に大きな影響を与えた『婦人良方大全』は、江戸時代に入ると、寛永十三年（一六三六）大和田意閑版をはじめとして和刻本として刊行された。しかし、この『婦人良方大全』には、胎児十月生成の様子は、具体的には明示されておらず、結局のところ、啓益も自らが批判したかたちとなった『耆婆五臓論』の説を援用して自説を述べるにとどまった。

三、『耆婆五臓論』の説

元禄版『女重宝記』には、すでに見たように、「一月めを医書には白露のごとしといふ」「二月めを医書には桃花のごとしといふ」として、初月・二月目に限って医書からの引用がある。『女重宝記』より先、婦人の妊娠・出産について記した書に、梅塢散人の『婦人養草』（貞享第三・一六八六・の冬自序、元禄二己巳歳・一六八九・五月上澣日／書林／洛陽　梅村彌右衛門／賀陽　塚本治兵衛／同　半兵衛）がある。その巻一ノ三には、胎児十月生成の様子が次のように記される。

一月は子はじめてとゞまる月なれば白露のごとく
二月は桃花のごとく
三月は男女のかたち定る
四月はかたちかつそなわり
五月は筋骨かでき
六月は髪の毛はへ
七月は魂をあそばしめて左の手を動す
八月は同しく右の手を動す
九月は三たび子身を転じまろばしめ
十月は気をうけ支躰具足してうまるゝ

また、稲生正治の『蠡斯草』（元禄かのえ牛・一六九〇・の春序）「二保養」にも、部分的ではあるが、「胎のありさま、はじめの一ヶ月は、一しずくの露のごとし。二ヶ月は、その露すこし色つけるのみ也」「三ヶ月ののちは、かたちやう〳〵そなはる」「七八ヶ月は子その手をはたらかす」といった記述が見られる。これらの依拠するのは、香月啓益が『婦人寿草』に引用した『婦人良方大全』[注6]に所載される『耆婆五臓論』の説であり、その原文を示すと次のようである。

一月。如珠露。
二月。如桃花。
三月。男女分。
四月。形象具。
五月。筋骨成。
六月。毛髪生。
七月。遊其魂兒能動左手。
八月。遊其魄兒能動右手。

九月。三轉身。
十月。受氣足。

『婦人寿草』を著した香月啓益は、また、小児の誕生・生育・病気・教育などを記した『小児必要養育草』（元禄十六癸未歳・一七〇三・仲秋日序、正徳第四甲午歳・一七一四・五月吉日刊）を公にしている。その巻一ノ二「誕生の説」には、やはり「父母和合してその両精子宮に入る。一月は珠露のごとしとて其形たゞ一圓水の露の玉に似たり」「二月は桃花のごとしとてすこしく其形をあらはす」といった記述がみえるが、さらに「千金論に胎内の児のかたちを載す」として、その説を引用する。

一月は珠露のごとく
二月は桃花のごとく
三月にして男女のかたちわかる
四月にそのかたち全くそなはる
五月に五臓生じ
六月に六府成就す
七月に関竅通ず（関竅とは関節九竅の事也。関節とは形のつがひ手足の伸屈する所をさしていふ。九竅とは目二つ耳二つ鼻二つ口一つ前後の二つの穴を合て九竅といふ）
八月に其魂あそぶ
九月には三度其身を転ずる也
十月には気をうけたる

唐代の医薬学者である孫思邈（隨文帝の開皇元年・五八一・生、唐高宗の永淳元年・六八二・没）は、『備急千金要方』三十巻と『千金翼方』三十巻を著した。両書をあわせて『千金方』と総称する。この両書においては、婦人科が臨床各科の冒頭におかれ、特に、『千金要方』の婦人科は、一冊の専門書とみなせる質と量をほこる。『千金方』の引用は、すでに平安時代の『医心方』に見えるが、江戸時代に入り、『備急千金要方』は、万治三年（一六六〇）、京の書肆敦賀屋久兵衛より、『千金要方』は、後年の明和七年（一七七〇）、京阪の書肆山本長兵衛・山口屋又一より、最初の和刻本が出されている。しかしながら、啓益の引用するところに合致する説は見いだせず、『備急千金要方』では、十月それぞれの胎児・母胎の様子と養生法を詳しく述べた後、次のような説を載せる。

妊娠一月始胎
二月始膏
三月始胞
四月形體成
五月能動
六月筋骨立
七月毛髪生
八月臓腑具
九月穀気入胃
十月諸神備日満即産矣

『小児必要養育草』の胎児十月生成の説は、「千金論」に拠るとはするものの、『耆婆五臓論』の説に多く依拠していると考えられる。江戸時代前期の育児書に出る、胎児生成の様子は、そのほとんどが、『耆婆五臓論』を拠りどころとする。元禄版『女重宝記』の一月目・二月目に引用される「医書」の名も、本を正せばこの『耆婆五臓論』であった。そして、『耆婆五臓論』のこの説は、同じ時期、『聖徳太子伝暦』の注釈書の中にも、見ることができる。

四、蘭山〈胎内十月の図〉の原拠

太子の父用明天皇と母間人穴太部皇女の婚姻に始まり、大化元年（六四五）の蘇我本宗家滅亡までを編年体で記述した聖徳太子の伝記が『聖徳太子伝暦』である。この『聖徳太子伝暦』には、皇女妊娠八ヶ月目に、胎内より胎児の

声が聞こえたと記す。太子は何故に胎児八ヶ月目にして声を発することができたのか。『聖徳太子伝暦』の注釈書では、この問題への答えとして、妊娠から出産に至る胎児の変化を説明した〈懐胎十月の説〉が、諸書を引用して陳述される。(注7)

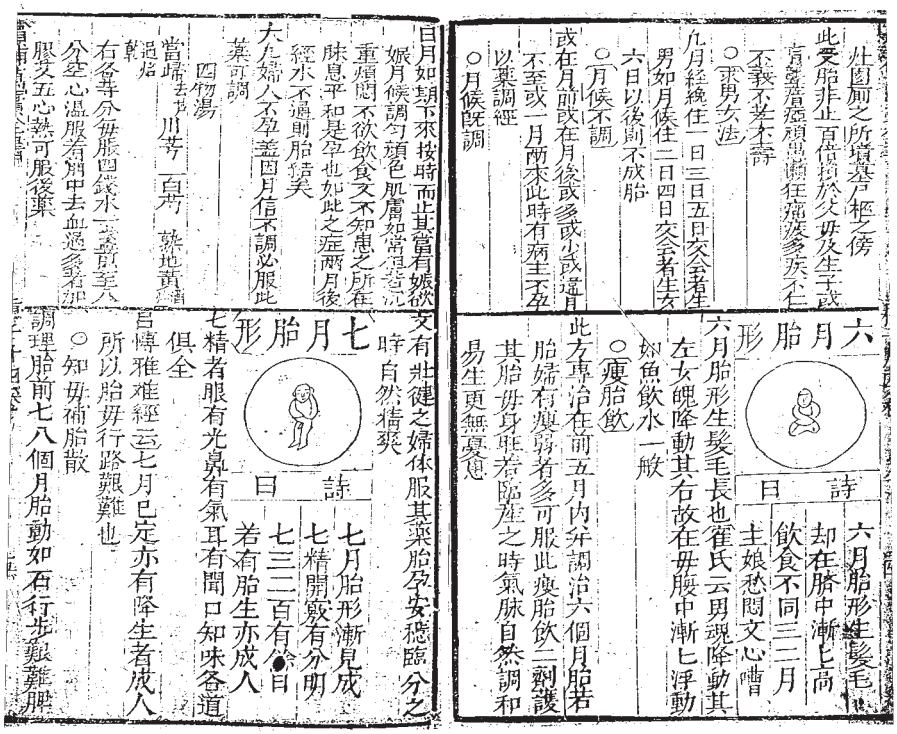
法隆寺阿弥陀院の住持実秀（永禄三年・一五六〇・生、慶長二十年・一六一五・没）は、太子伝講談のための草稿を残して没した。これらは、弟子によって『太子伝撰集鈔通要』三巻六冊（寛文元辛丑年・一六六一・孟秋吉日／中野正左衛門梓行）、『太子伝撰集鈔別要』五巻五冊（寛文十一辛亥歳／二月吉日／中野小左衛門）として刊行された。江戸時代において公刊された最もはやい『聖徳太子伝暦』の注釈書である。この二書のうち『太子伝撰集鈔通要』には、『聖徳太子伝暦』の当該箇所の本文「経八月言聞於外」について、次のような注を載せる。

瑜伽論云。若唯八月此名レ圓満ト文。
岐婆五臓論云。父母精氣爲二魂魄一。即墨白以分二晝夜一。
一月懐胎如白露
二月如桃華
三月男女分
四月形象具
五月筋骨成シ
六月毛髪生シ
七月遊二其魂一而能動二右手一
八月遊二其魄一而能動二左手一
九月三轉シ
十月満足ニシテ文。
是モ既八月マテニ依身成立シ魂魄具足スルナレハ瑜伽ニ符合スル歟。

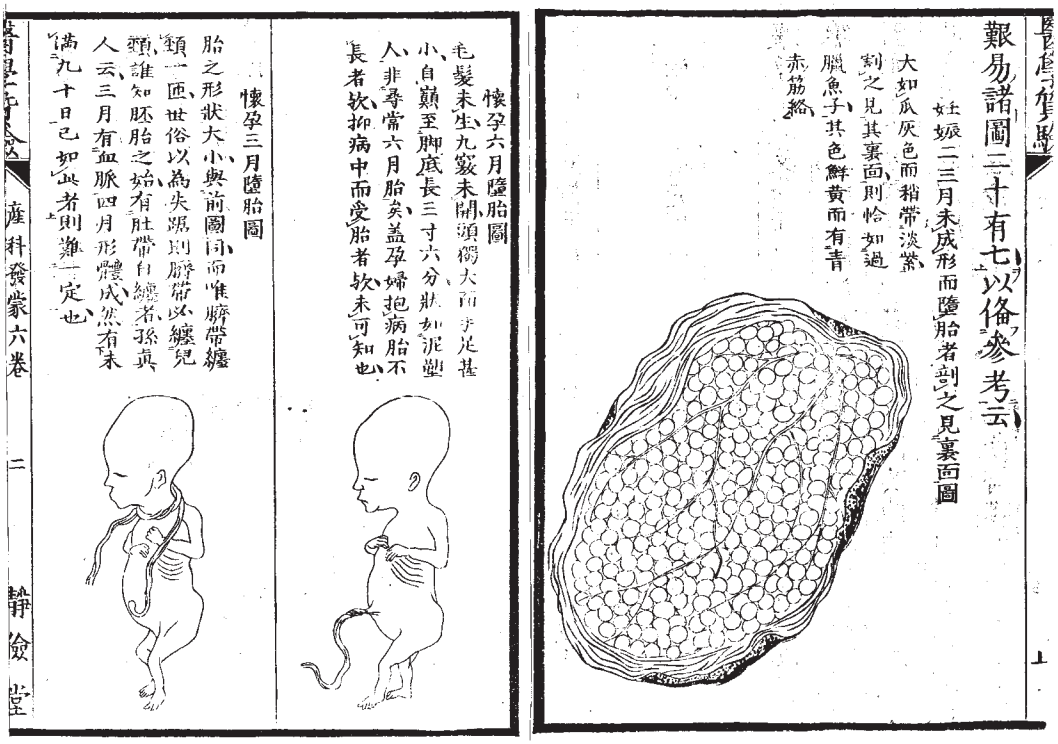
現存する古注のなかで、この本文の注として、最もはやく『耆婆五臓論』を引くのは、聖徳太子建立の七か寺のひとつ橘寺の僧法空の『聖徳太子平氏伝雑勘文』六巻六冊（巻末に、正和三年・一三一四・二月十八日金剛佛子法空）である。実秀は、鎌倉末以来師承されてきた注を、それまでの『聖徳太子伝暦』注釈書と同様に受け継いで記したことになる。しかし、実秀注の後に刊行された浅井了意の『聖徳太子伝暦備講』（「維時延寶六歳戊午・一六七八・黄鐘中浣良辰日」自序）には、この部分の注として、『耆婆五臓論』のものではない〈懐胎十月の説〉をあげる。

經八月トハ凡ソ胎中十箇月ノ形相ヲ明ス。
醫家ノ者説ニ云フ。父母ノ清血和合凝結ス。是ヲ受胎ト名ク。魂魄已テニ氣ニ随テ成満ス。
所レ謂ハ
初メ受胎ノ月ハ一點ノ英珠其ノ形チ草上ノ露ノ如ク
二月ハ桃花ノ初テ綻タルニ似テ其ノ色紅シ。
三月ハ胎形似タリ二蚕蛋一。
四月ハ胎形分テ四肢ニ始テ児質ト成ル。
五月ハ男女ノ形相分定ス。
六月ハ毛髪生シ
七月ハ胎形漸ク成テ七精開レ竅ヲ分明ナリ。謂ク兩目ニ光有リ。兩耳有レ聞コト。
鼻ノ兩竅ニ氣通シ口ニ味ヲ知ル。
八月ハ胎児ノ真形定マリテ精神有リテ満ス。
九月ハ始娠重キコト山ノ如ク母腹ノ左右動クコトヲ覺ユ。
十月満足シテ骨節四肢倶ニ開ケテ方ニ産生スト云フ。

了意注には、「医家ノ者説ニ云フ」とあるが、この引用部分は、まさしく蘭山がその『女重宝記』のなかで「医書に云胎内十月の図」として引用する記述によく類似する。そして、またこれと類似する記述は、明代後半、萬暦・崇禎年間（一五七三〜一六四四）に福建省建陽で出版された「通俗的日用類書」のなかに見ることができる。(注8) 例えば、刊年が明らかなもののなかで最も早いとされる萬暦二十五年（一五九六）刊の『新鍥全補天下四民利用便觀五車拔錦』巻十九「保嬰門」には、「十月胎形圖説」として、初月から十月までの胎形図を絵で示し、また、それぞれの月に「詩曰」として文による解説



（図五）『増補萬寶全書』



（図六）『産科発蒙』

を付し、「劉五妹云」あるいは「崔氏云」などとして補説が入る。その説明はやや長きにわたるので、類似の部分を適宜あげると次のようである。

初月胎形如珠露。……初月受胎一點精華如草上露珠凝。……
二月胎形北極中。如花初綻蕋珠紅分枝。……其胎受一月満足以受血近陰形似桃花分枝華。……
三月胎形似血凝。……其月胎形漸化長。如蚕一頭大一頭小形。……
四月胎形分四肢。……入宮胎隠始成児。……
五月男女分定。……
六月胎形生髪毛。……
七月胎形漸見成。七精開竅有分明。……七精者眼有光。鼻有気。耳有開。口知味。各道倶全。
八月胎形定見真。孩児腹内有精神。……
九月胎娠重若山。……到此月数即主胎娠左右脇大動。……
十月満足欲生胎。四肢罅縫骨精開産下。……此月胎形満足。四肢開骨罅縫倶開方許降生。……

この時期刊行された通俗的日用類書の「十月胎形圖説」は、諸本によって、胎形図に相違が見られるが、本文はほぼ同じである。しかし、どの本もその依拠するところを載せない。そのために、了意は「医家ノ者説ニ云フ」とし、蘭山は「医書に云胎内十月の図」としたと考えられる。ともに直接拠った本を明らかにすることはできないが、あるいは、蘭山は、胎形図の類似より、このうちの一本である『増補萬寶全書』巻之廿四所載のものによったか（図五）。

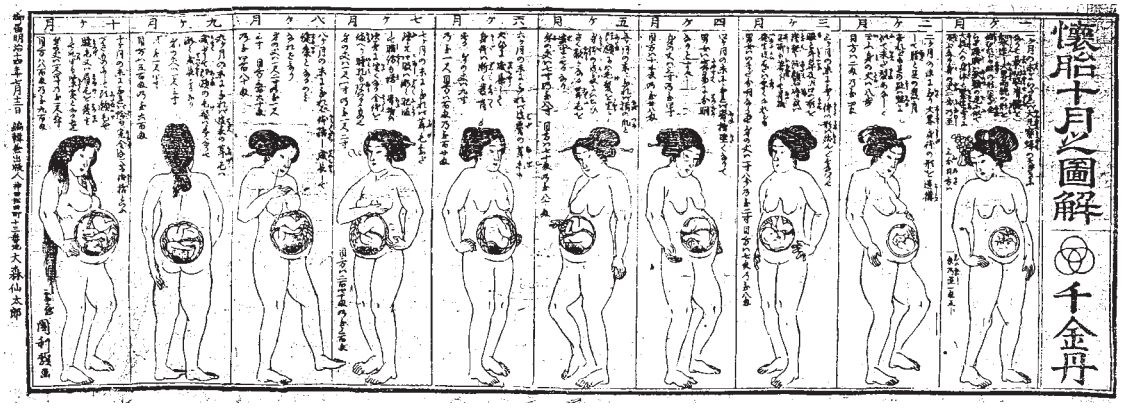
蘭山は、その『女重宝記』巻三ノ四「古方医家帯の説」で、妊婦が妊娠五ヶ月目に腹帯をすることの始まりを、賀川玄悦が、その著『子玄子産論』において、我が朝の神功皇后三韓征伐の故事に求めたことに対し、「支那の書に婦人産帯記といふものあれは香川の説日本ばかりと云は産帯記を見ざるにや」と痛烈ともいえる批判を行っている。賀川玄悦（元禄十三年・一七〇〇・生、安永六年・一七七七・没）は、四十余歳より産科の研究に専念し、京の書肆河南四郎兵衛・丸屋市兵衛より『子玄子産論』を、明和二年（一七六五）に刊行。この書は、江戸時代中期の産科の勃興を促し、その術は、玄迪、玄吾と相承されて、賀川流産科を生み、海内に伝播された。玄悦に教えを受けた片倉鶴陵（宝暦元年・一七五一・生、文政五年・一八二二・没）は、牒分的児（デイヘンテル）（Deventer）をはじめとする阿蘭陀の産科書を参考にして、『子玄子産論』および『産論翼』（安永四乙未・一七七五・春三月、京師書肆河南四郎兵衛・河南喜兵衛発行）を敷衍して、『産科発蒙』（寛政十一年己未・一七九九・夏五月、東都書肆須原屋茂兵衛）を著している。ちなみに、玄悦は、妊娠五ヶ月目に腹帯を締めることの非を説いており、鶴陵の著には、解剖学的見地に基づく胎児の図が載る（図六）。

浅井了意は、『聖徳太子伝暦』の注釈の世界において、師承され秘伝とされてきた〈懐胎十月の説〉に、中国より舶来されて当時最新の知識を載せると考えられていた類書の説を以て、その博識を誇示しようとした。遙か下って蘭山も、文芸界における中国ブームの中、手にした類書の説に飛びついた。しかし、その時期は、国学の台頭、蘭学の浸透といった、知識人の身としてどこに己の場を立脚するかが問われる複雑な時代であった。蘭山が、〈胎内十月の図〉の原拠を明示しなかったのも、そういったところに理由があるのかもしれない。

結語

蘭山は、元禄版『女重宝記』が載せる〈胎内十月の図〉および〈胎内十月の由来〉を否定して、中国日用類書の説を引用した。しかし、江戸後期に至ってもなおその旧説が、お産の当事者である女性の間で、一種神懸かり的に信仰されていたことが、次の蘭山の記述より窺えようか。

仏道の信心者にて日輪も阿弥陀と思ひ七月廿六夜の月の出には三尊の弥陀を拝すると思ふ人には無用也。文盲と愚痴と物に惑され理非にくらきと取のけざれば正道の理はしれざる也。然らば懐妊の女中初月は錫杖、二月めは獨鈷を孕てあると思ひ不動様からしやか如来へ渡されたとおも



（図七）『懐胎十月之図解』

ひて信心有べし。年来これにて済しこと也。

何故に生命は誕生するのか。お産は、古来神秘に満たされており、したがって、迷信がかえってそのよりどころとなる。蘭山の説は、お産を経験する婦女にとって旧説に変わるものとなり得たのか。

明治に入ると、西洋医学を取り入れた『造化機論』（明治八年・一八七五・刊）という啓蒙的な性科学書が出版され、一大ブームを巻き起こして、類書が次々に刊行されていく[注9]。そして、それは、庶民に最も密着した媒体のひとつであった浮世絵にまで影響を及ぼしていく[注10]（図七）。

山東京伝は、享和四年（一八〇四）に、黄表紙『作者胎内十月図』を著して、かつての〈体内十月の図〉をパロディとして扱った。また、美人画家として知られる渓斎英泉は、艶本『閨中紀聞枕文庫』（初編文政五年・一八二二・刊、二編同六年刊、三編同七年刊）のなかで、多数の奇想天外な「腰胎の腹中の図」を描き、そのうちの一図には、「倣解体新書写」と記されるものがある。

一部都会人の中では、もはやかつての〈体内十月の図〉は、古めかしいものになっていた。しかし、一方で、なおそれを信じる人々もいた。蘭山が、この微妙な時期に主張した中国明末出来の〈体内十月の図〉が、当時の婦女にどう受け入れられたのかは定かでない。

注

（1）『女重宝記』の諸本については、井上和雄「元禄版『女重宝記』」（『書物展望』第6巻5号昭和11年、後『書物三見』昭和14年に所収、さらに『増補書物三見』日本書誌学大系4昭和53年青裳堂に収録）、島田勇雄「『女重宝記』の諸本について」（『近代』39号昭和41年11月）、小川武彦『女重宝記／家内重宝記』近世文学資料類従参考文献編18（昭和56年勉誠社）解題、斎藤醇吉「翻刻女重宝記・男重宝記－江戸時代における家庭教育資料の研究－」（昭和60年12月財団法人日本私学教育研究所）等参照。

（2）菊池仁「〈胎内十月図〉の由来－熊野の本地譚との接点から」（『室町芸文論攷』平成3年12月）、坂口弘之「説経・古浄瑠璃と仏教－語りと絵」（『庶民仏教と古

典文芸』平成元年世界思想社所収）等参照。

（3）山田和人「からくりと古浄瑠璃－からくり「懐胎十月図」をめぐって」（『歌舞伎研究と批評』平成4年6月）参照。

（4）中村一基「「胎内十月の図」の思想史的展開」（『岩手大学教育学部研究年報』平成2年10月）、拙稿「胎内十月の由来－仏書『生下未分之話』『生下未分語』をめぐって－」（『東京成徳短期大学紀要』平成5年3月）および「大阪府立中之島図書館石崎文庫蔵写本『三賢一致之書』について附翻刻」（『東京成徳短期大学紀要』平成6年3月）等参照。

（5）苗村丈伯については、大田栄太郎「重宝記類と苗村丈伯（道益）－武家重宝記の発見など－」（『書物展望』10巻11号昭和15年）、同「苗村丈伯の略伝附男重宝記と浮世鏡との比較」（『国語と国文学』昭和15年11月）、鈴木行三「誤られたる重宝記の作者苗村丈伯」（『書物展望』11巻1号昭和16年）、市古夏生「『理屈物語』作者考－山本泰順と苗村丈伯－」（『国文白百合』昭和50年3月）、同「苗村丈伯における類板の問題－仮名草子作者小伝」（『国文白百合』平成元年3月）等参照。

（6）『耆婆五臓論』そのものは、中国本土では、明初には逸亡したのではないかと考えられている。このことについては、拙稿「中国目連戯〈懐胎十月の歌〉考」（『東京成徳短期大学紀要』平成14年3月）を参照されたい。

（7）このことについては、拙稿「近世「聖徳太子伝暦注」所載〈懐胎十月の説〉考－『耆婆五臓論』の説と「十月懐胎三十八転」の説をめぐって－」（『東京成徳短期大学紀要』平成13年3月）を参照されたい。

（8）「通俗的日用類書」の影印刊行は、現在、汲古書院より『中國日用類書集成』として継続刊行中。

（9）上野千鶴子『風俗性』日本近代思想大系23（平成2年岩波書店）解説には、十六冊の類書があげられている。また、木下直之『美術という見世物』（平成5年平凡社）の一章「胎内十月」では、幕末から明治にかけて、胎児の様子を模型にしたものが見世物化していくことが述べられている。

（10）これらの浮世絵は、中野操『錦絵医学民俗志』（昭和55年金原出版株式会社）に収まる。なお図七は、本学研究室所蔵のもの。